［そ　の　他］

「透析者のくらしと医療」を読んで

春木繁一

1　はじめに

正直言って，この書（杉澤秀博，西　三郎，山﨑親雄編：透析者のくらしと医療; 日本評論社）を読むのにはかなり苦しい思いをした．それは，私が疫学，統計学による論文を読み慣れていないことにもよるが，なんといっても，その内容が「重い」のである．おそらく，書いておられる筆者（ことに直接に透析医療現場を経験しておられない公衆衛生，医療統計，保健福祉，看護医療など専攻の方々）は，それほどにはこの「重さ」を意識しておられないであろう．が，読むほうの私（透析歴 35 年目になる）は，示されたデータないしエビデンスの背後にあるひとつひとつの事例，臨床的事実を具体的に思い起こすことになってしまって，途中で何回もこの本を閉じてしまい，瞑想することが少なくなかった．

ここに書かれている現象は一層顕在化して，現在進行形で透析医療の現場で現実化している．そして，私はその場に患者および観察者としているのである．

2　透析者のくらしをめぐる問題点と提言

序章では「透析者のくらしと医療をみる新たな視点」と題して，これまでの透析者の心理・社会・行動に関する研究の歴史をおおまかにたどっている．そして，透析者の高齢化が今後どのような保健福祉問題をもたらすであろうか，という疑問を投げかけて，この書のめざす共通のテーマとしたことを説明している．

この章で特筆すべきは，用いられた分析データベースの特徴が述べられていることである．それは（社）全国腎臓病協議会と（社）日本透析医会が共同で，約 5 年ごとに実施している透析者と透析医に対する全国アンケート調査であることが明らかにされている．回収率が 77.7～86.9%（1986 年から 2001 年までの 5 年ごと 4 回で）であったというから高率の回収率である．

ついで，第 1 章では「高齢透析者が直面する保健福祉問題」が論じられる．一般高齢者よりもうつ状態にある人や要介護者の割合が高いこと．うつ状態は尿毒症などの身体的原因が複合的に重なっている可能性が大きいこと．地域への活動参加はうつ状態の軽減に特に有効であること．家族，親族，友人，知人，近隣の人々からの情緒的支援を受けられるような仕組みが必要との提言もあった．

一臨床精神科医として，毎日を患者さんと接していて，この提言は高齢者精神医学でもまったく同じである．が，実際には一臨床家が実行できる日常の臨床の限界を超える提言であって，個人的な努力のみではなくて，社会的な合意形成やシステム作りが必要だとつくづく思った．

第 2 章では「透析者の就業問題」が取り上げられた．これも昔からの頭の痛い問題である．そして，なおあまり実態は昔と変らないことをいやでも知ることになった．すなわち，低い就業率，不安定な就業，低い就業収入など昔とまったく変らない．高い就業意欲があるにもかかわらずである．今後の日本が，いわゆる

松江青葉クリニック

「勝ち組」「負け組」と二分化されていく中で，透析者に限らず，障害者はどう処遇されていくか，を考えると，苦しいテーマとしか私には考えられなかった．

第3章は「透析者・家族の社会的活動・支障」が論じられた．この章では，中年期の透析者とその配偶者に焦点が当てられた．恐れていたことだが，男女を問わず地域活動への参加が特に低いこと，友人との交流が低いこと，また面白い結果だが透析時間が長い人ほど友人との交流が活発であることが指摘された．

配偶者もいくつもの困難を抱えていることも明らかになった．性生活や経済状態に支障をきたしていること，配偶者の生活上の支障は透析者の身体機能に関連していること，配偶者が周囲からのサポートを多く得ていることが支障を防止させることも明らかになった．

ひとつひとつが思い当たることで，ここでも透析者の健康維持およびQOL向上が，単に透析者ひとりだけのものではないことが示された．

第4章では「血液透析患者の医療参加」という題が登場した．「うん，うん」とうなずける内容が並ぶ．患者ももっと積極的に自分自身の医療に参加してほしいという医師の要望がある．もっとも，過去日本では有名なパターナリズム（父親的温情主義：医師の言う通りにやりなさい式の医療のこと）で医療を行ってきた歴史があるので，患者から言えば「今になって，急に患者も医療に参加しろなんて！　自己決定と言われても」という気持ちが湧こう．ひとつ忘れられていることは，「自分は医師になって以来，ずっと患者中心主義できた」と主張する医師も，医学生，インターン，医局員時代は，古いタイプの教授や先輩医師に，知らず知らずのうちにパターナリスティックな考え方で教えられてきたという事実があることである．身体に染み付いていることに十分に意識を払いつつ，インフォームドコンセントに基づく医療を心がけたい．

ここで取り上げられている問題は「医師と患者の認知のズレ」である．この基底に患者のもつ不信や不満，不安があるのではないか，というのがこの章の筆者の仮定であった．それゆえ「患者の満足度」について質問している．その結果については本書をみていただきたい．

余談になるが，私はよく叫ばれるインフォームドコンセントについて，大部分の人々はインフォームド，すなわち「伝えること」「情報」に力点をおいて語っていると思う．が，精神科医の観点からは，実はコンセントのほうにもう少し重心が置かれると良いと思う．コン＝con，セント＝sentier，すなわちcon sentierはto feel togetherの意味だと理解している．医師と患者がお互いに「共感しあう，同感しあう」ことの心の作業がインフォームドコンセントの本質であろうと思っている．契約を交わす，書類や記録に残すというのは，この心の作業ののちのことであろう．「透析という医療はお互いに大変ですが，今後いっしょにやっていきましょうね」との情緒的交流を幾度となく行っていく姿勢を医師のほうが常にもちたいと思う．

第5章は「患者および家族の医療への参加」という題の論文である．4章よりももっと自らの医療を自身が主人公になっていって欲しいとの意向で書かれている．「究極の患者参加型の医療：在宅透析」について，これまでの反省点と今後の課題が述べられている．

ここで問題になるのが危機管理の考え方である．詳細にこれまでの経験をもとに記載されていく．災害後の透析，透析中の災害などについても，患者や家族の参加によるマニュアル作成が提案されている．一方で，超高齢者の透析医療についても触れられていて，これらの人々は「意志の表示」も「医療への参加」も難しい場合が多く，家族の参加のみでは現実的でないとして，今後どのように医療者側が取り組むかが課題であるとしている．

第6章は「患者会活動の意義と役割」で，これまでの「全腎協」の30年に及ぶ活動を検討し，高く評価している．今後，次第に個別化していく個々の課題，多様化する要求，個々の患者の生活問題など，大きい組織がどう個別的な問題に向かうかは大変に難しいと指摘している．組織がその力を消耗しない方向での再組織化がテーマである，との鋭い指摘がある．これも，患者の高齢化と無縁ではないであろう．

第7章では「透析患者のターミナルケア」が述べられた．終末期の定義，長期透析患者の合併症，bad newsをどう患者に伝えるか，医療行為に対する患者の意思の確認などが解説される．いずれもが重いテー

マである．この章の筆者の論文のいくつかは幾度か読ませて頂いていた．が，こうしてまとめて読むと，すべてのことがらが私自身のごく近い将来であることをいやでも実感させられた．

living will にしても advanced directives にしても，頭では理解していても，その実行についてはつい躊躇する自分がいる．さらに，透析中止，透析非導入の話になると「言うは易し，行うは難し」の気持ちが先立つ．日本の透析医療は，今後の日本の高齢者医療のあるべき姿を先取りしているとの指摘は正しい．透析医療をになう透析者，家族，透析スタッフが，真剣にその適正な医療のあり方を構築する努力が必要であるとの筆者の指摘は重要である．が，同時に国民，社会一般にもそれを求めていることに同感である．

第 8 章は「透析者のくらしと医療は 15 年間にどのように変化したか― 4 回の調査の傾向分析―」である．

腎臓病がかなり悪化しての透析導入が多い，透析時間の短縮化が目立つ，要介護透析者が次第に増加している，通院透析がだんだんと家族の負担になっている，透析者の経済水準は全体的には向上しているが，一部に年収 200 万円以下の世帯が 15% 前後ある，などが示された．

第 9 章では「データの質」と題して，ここで用いられた調査データの信頼度がチェックされた．客観的な姿勢に終始された調査者の態度に敬意を表したい．

たしかに，医療の社会的側面を語るとき，こういう俯瞰的な態度がどうしても必要である．われわれ臨床家は，地図でいえば，一つの市や町の地図を，いや時には町内の一軒一軒を記載した「ゼンリン地図」に頼っている．反するに，この書の多くの筆者たちは，日本地図か世界地図によって広く人間もしくは人類，病態一般，生活一般，心理社会的共通事項，さらには透析文化などにも当てはめることのできる視点をもって，広くものごとを見て考えることの重要性を示してくれている．それにしても患者，透析医ひとりひとりが記載した膨大な量のアンケート用紙から，この共通するデータを意味のあるデータとして拾い出す仕事は，相当の根気とエネルギーを必要としたであろう．

3　おわりに

いつの日にか，このような筆者たちによる生のディスカッションが企画されて，もう少し実態が具体的にわかる日を期待したい．労作に敬意を示したい．

なお本書の筆者は杉澤秀博，JERSEY LIANG，熊谷たまき，浅川達人，山﨑親雄，大平整爾の各氏である．